

# 栗原の史跡



連理の神

昭和五十年 県指定天然記念物

九十九坊跡

昭和三十二年 町指定史跡



## はじめに

水野 隆生

平成二十八年九月頃、栗原地区街歩き案内人にならないかと話があり、浅学ながらお引受けしました。その年の十一月に垂井町観光協会主催の「栗原地区街歩きワーケーション」が開催されることを知り、そのために地区内の史跡を調べ始めました。幸いにも岩手にある禅幢寺（竹中家の菩提寺）の寺族は叔母にあたり、半兵衛重治公の話をよく聞いていました。さらに、父親が平成九年に発行した「栗原のれきし」が手元にあることから大いに参考にすることができました。「不破の地名」からの引用は事務局の服

部真六様、合原小学校（写真）は小竹校長先生、焼失以前の「清水寺」と「りしおう寺」発掘（写真）は連合自治会長の古川様、栗原踊りの切り絵は増田晴風氏のご子息から各々掲載の快諾頂いたことを厚くお礼申し上げます。

まだまだ、調べ残しの史跡もあり、拙文ではありますが、地域に微力ながらお役に立てればと思い、ここに「栗原の史跡」を発行した次第です。今後皆様方から内容の間違いや誤字・脱字等お気づきの点がありましたら、ご指導ご鞭撻をお願いします。

平成三十一年 初春

目次

一	栗原の地名
二	栗原古墳群
三	黄金塚古墳
四	冠石神社
五	牧田合戦
六	九十九坊跡
七	連理の榊
八	清水寺と梵鐘
九	竹中半兵衛重治隠遁の地
十	関白 豊臣秀次公側室のお長
十一	栗原村の領主変遷
十二	長曾我部盛親陣跡
十三	長東正家陣跡
十四	栗原踊りと白河踊り
十五	象鼻山（栗原山の山の神）五社巡り
十六	栗原の神社
十七	栗原のお寺
十八	栗原耕地整理・整田碑
十九	栗原山義人碑
二十	栗原の小学校
二一	八幡神社 補足
二二	栗原の史跡年表
二三	栗原地名図



(栗原踊りの切り絵 増田晴風氏の作品 使用許諾済)

# 栗原の史跡

## 一 栗原の地名

栗原の初見は「続日本紀」天応元年（七八一）七月十六日の記事に「柴原勝子公（しばはらのすぐりこきみ）」が「美濃国不破郡栗原地」を賜うとでています。このとき、子公は「柴原勝」で「栗原連」に改姓したという話が載っているので、それにちなんで地名が「栗原」に変わったとも考えられている。また、栗原の先祖は四世紀末頃からこの地に住み生活をしていたと思われる。なお、はじめから「柴原地」を「栗原地」という資料もあります。「和名類聚抄（わみようるいじゅうしょう）」にも栗原郷と記載してあります。

注・和名類聚抄は、平安時代中期に作られた辞書である。承平年間（九三一～九三八）源朝臣順（みなもとのあそんしたごう）が編纂した。

余談 栗原姓は岐阜県不破郡垂井町栗原が発祥となる。

## 注 史料①を参照

## 二 栗原古墳群

栗原山山麓の標高三十m前後の尾根上に位置する所に古墳群があり、現在までに計六基が確認されています。一号古墳は円墳で通称「黄金塚」、二号墳は全長四十四mの前方後円墳です。それは、後円部径約二十八m、高さ約三m、前方部幅約十二m、

長さ約二十二m、高さ一・五m、くびれ部幅約十三m、周濠と葺石が確認出来ます。従来、埴輪は無いとされてきましたが、今回の中分布調査で、新たに円筒埴輪の突帯部分と、盾形埴輪の一部が確認されました。三号古墳は、一、二号墳とは別々の尾根上に位置しています。昭和三十七年（一九六二）の名神高速道路建設の土砂採集によつて、滅失しており、工場用地として改変されています。発掘調査で、石室や弥生土器が出土し、古墳時代の前期を遡る可能性が指摘されています。残る三基（四・六号墳）は一・三号墳の南方の尾根上に立地する円墳で、分布調査によつて周辺から古墳時代の須恵器のほか、弥生土器の破片も確認されました。

注 上文は第五十一回企画展 遺跡発見 タルイピアセンター 平成二十八年十月発行から

G 3 2 T 0 2 0 5 3 境野古墳 境野 山林 円墳 弥生時代  
G 3 2 T 0 2 0 5 6 大平3号古墳 栗原 山林 円墳

昭和三十八年発掘調査

G 3 2 T 0 2 0 6 2 栗原1号古墳 栗原 山林 円墳

古墳時代 昭和三十七年発掘調査

G 3 2 T 0 2 0 6 3 町史跡 昭和四十一年一月二十六日指定

栗原2号古墳 栗原 山林 前方後円墳 古墳時代

町史跡 昭和四十一年一月二十六日指定

G 3 2 T 0 2 0 6 4 栗原3号古墳 栗原 山林 円墳

昭和三十年発掘調査 滅失

G 3 8 T 0 2 0 6 5 九十九坊跡一 栗原山 山林 寺院跡 室町～安土桃山

町史跡 昭和三十一年六月十五日指定

G 3 8 T 0 2 0 6 6 九十九坊跡一 栗原山 山林 寺院跡  
G 3 2 T 0 7 0 1 8  
G 3 2 T 0 7 0 1 9  
G 3 2 T 0 7 0 2 0  
G 3 2 T 0 7 0 2 1 清御子古墳  
G 3 2 T 0 7 0 2 2  
G 3 2 T 0 7 0 2 3

室町～安土桃山

追加：そのとき発掘された装飾品の一部が垂井ピアセンター内に保管されている

かんむり

#### 四 冠石神社

栗原4号古墳 栗原 山林 円墳  
栗原5号古墳 栗原 山林 円墳  
栗原6号古墳 栗原 山林 円墳  
栗棘庵跡 栗原 山林 中世  
清水寺跡 栗原 原野 中世

#### 三 黄金塚古墳



この地一帯が名神高速道路土砂採取地となり樹木を伐採したら、多数の古墳が発見された。境野地区上部の大平古墳群八基のうち、通称「いしづとけ」栗原古墳群六基が発掘調査された。いずれも円墳で、石室からは、土器の埋葬品をはじめ、刀剣、金の耳輪などの装飾品が発掘された。このうち栗

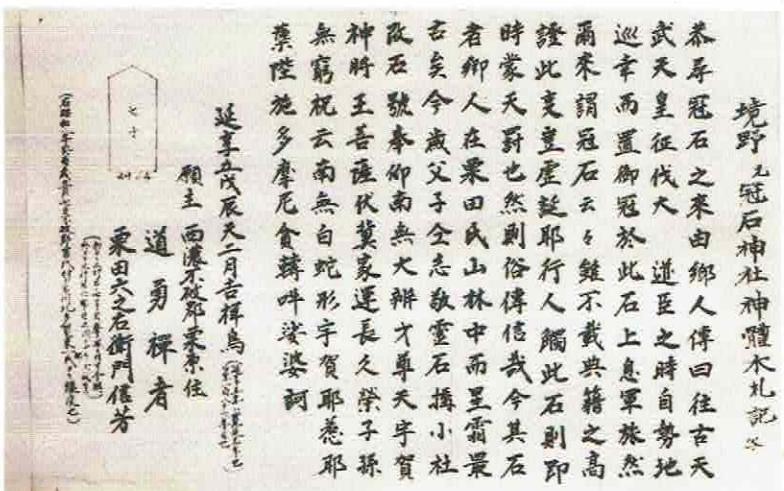
原二号古墳を黄金塚として保存している。壬申の乱後の兵器や財宝の隠し場所が黄金塚との伝説が残っている。現在残っている古墳中には盗掘の跡が確認されている。

注：墳丘の規模は、後円部の径約一十八m、高さ約三m、前方部の最大幅約十二m、長さ約二十二m、高さ一・五mである。



字境野の南山麓に約二十貫目程（八十キロ）の石あり、天武天皇冠を置き給

栗原山境野部落の西に冠石神社通称（かぶろすさん）といふ小さな祠（ほこら）がある。今から五十数年位までは現在地より（五十m）位南方で石清水が湧き出て石で囲まれた泉水もあり神、椿等の茂った神々しい境内であつたようです。名神高速道路の土砂採集のため現在地に移つた。「不破郡史」には（四代天武天皇冠石）「合原村



ひし石なり（壬申の乱の折大海人皇子が吉野より伊勢路を経て

ご進軍の際栗原山麓を行在地とされた」と書いてある。また、

靈龜三年（七一七年）に四十四代元正天皇（女性天皇）が養老行

幸の際ここで休憩されたとき、冠を置かれた石とされている。

棟札があり、「靈龜歳中 人皇四十四代 栗田茂左衛門光宗 元

正天皇 御冠石 寶 於時貞享二歳乙丑八月二日奉勸請」元正

天皇は第一回靈龜二年（七一七）と第二回養老二年（七一八）の

二回養老へ行幸されているので棟札は第一回の時と思われる。

貞享二歳は一六八五年です。

注・写真は一七四八年のとき社の棟札に書かれた文字を書き写したもの

## 五 牧田合戦

大永五年（一五二五）江州小谷城主浅井亮政（あざいすけまさ）は、美濃進出を狙つて北国街道から関ヶ原をでて、伊勢街道と進み牧田に陣を構えた。これに対し美濃国守護土岐頼芸（よりのり）は、これを迎え撃つために栗原山に千七百余名の

軍勢を率いて到着した。八月二日両軍は栗原・別所・橋爪・牧田付近で激戦を繰り広げた。戦いが始まると、浅井方の優勢のうちに進み、土岐方は重臣および家臣多数を失い大敗した。これを牧田合戦という。この戦いで、西保城主不破河内守・大墳城主丸毛兵庫頭・本郷城主国枝大和守の一族は奮戦して、大手柄を立てた。小寺山城主稻葉備中守通則は、その子五人と共に討死してしまったので出家していた末子が還俗して稻葉家を継いだ。この末っ子が、勇将と称えられた稻葉良通（六十五歳から一鉄）である。このとき、この地は曾根城主稻葉備中守・府中城主不破河内守軍勢の陣所になつたと思われる。注・写真は当時



## 六 九十九坊跡

栗原山の中腹および山麓一帯に、昔「九十九坊」と称する百余坊の寺院があつたと伝えられている。奈良朝（七五七～七六四）の頃に既に多芸七坊の中に一ヶ寺として「不破郡栗原山に天台山正覺院末寺久保寺双寺」として「九十九坊ありき」と天文年間の文書にある。鎌倉初期に



浅井軍が造つたと言われている土星です。追加 稲葉良通の兄稲葉通明の娘阿牟（あん）は斎藤利三に嫁いだが、一五八二年山崎の戦いで利光が戦死。その後、四歳のお福は良通の庶長子重通の養女となり、母方の親戚にあたる三条西公国に養育される。後に重通の娘婿に稻葉正成がいたが、妻早死したので正成の後妻になり、二十四歳頃に正成と離縁する。一六〇四年京都所司代によつて京都に在住する教養ある乳母募集がなされ、三条西実条の推薦を受け、三人目の稻葉正利を産んだばかりの稻葉福二十六歳が応募したところ採用が決定。家光の乳母春日局となる。

は百以上の僧坊が建ち並び相当隆盛であったと思われる。建武二年（一三三五）十二月十八日に足利尊氏と新田義貞両氏の戦いで兵火にかかり、焼失したという。現在あるおびただしい数の五輪塔・石仏は往年おそらく全山に営まれた僧坊の近くにあつたものを、明治九年頃この地に集めて弔う。石仏は供養塔で室町中期のものと言われている。

## 七 連理の榦

栗原山の南端頂上近くにあって、昭和五十年十二月十日に県天然記念物の指定をうけた榦で高さ十一m、幹の太さ目通り三・四m、枝の長さ東西十四mの堂々たる大木『連理の榦』がある。

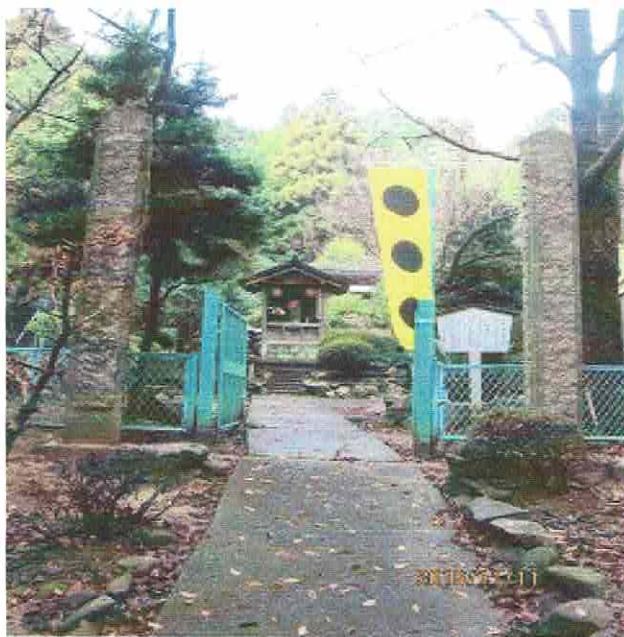


2017/02/25

樹齢四百五十年とも云われ、近くで見ると根本で幹分かれた太い幹や枝がいたるところにからみあつていているところから、別名縁結びの榦とも呼ばれている。堂々たる榦である。この地は、古くには日本武尊（やまとたけるのみこと）東征の帰路、伊吹山の荒ぶる神と戦

つて負傷し、玉倉部の清水で生氣を取り戻したのちに美濃に出る途中、ここで尾張・伊勢を一望した地と伝えられている。また、この山麓にあつたと言われている九十九坊武台殿の跡地とも、栗原城跡とも言わってきた。大正年間にはこの地で弘法信仰が広がり、横穴式の石像が安置されたことから、「奥の院の榦」とも呼ばれてきた。

## 八 清水寺と梵鐘



栗原山中にただ一ヵ所最後まで残っていた清水寺は、昭和四十九年四月に焼失した。この寺は、はじめ天台宗であつたが、明応年間（一四九二～一五〇一）大道真源禪師

が再興して、臨済宗に転宗したという。その後、衰退していったのを万治三年（一六六〇）、当時の栗田六郎兵衛らが協力して再建した。この寺の梵鐘（国の重要美術品に認定 昭和十七年）が、現在愛知県知多市金沢字郷中の八社神社に所蔵されている。この梵鐘には次の銘が刻まれている。



美洲不破郡清水寺奉

鑄治鐘 宝治元年(一一九〇)  
四七)九月二十一日 東  
大寺大工 山河助清

(梵鐘は高さ一〇四・五  
cm、口径六十三cm)

当神社の記録による  
南北朝の戦乱

と南北朝初期の戦利品より、一色兵部が戦利品として知多に持ち帰り

戦勝祈願（文明二年一四七〇年）として奉納したとのこと。  
注 写真は八社神社に奉納された清水寺の梵鐘

清水寺の寺歴

茲に濃州不破郡栗原郷象鼻山は往昔天台宗九十九坊の古跡にして今尚山中に九十九坊の字名を存有せり

夫れ当山は往古天台宗九十九坊の一院御本尊は十一面觀世音菩薩なりし恵心僧都の御作なりしと聞き居たり

建武年間（一一三一～三六）新田氏・足利氏・南北朝の戦い数年たり

この時建武二年（一二三五）五月十八日足利勢兵焚の乱により伽藍悉く皆鳥有に皈し当時の寺鐘は現在知多市金沢区八社神社に社宝として祀れる（陣鐘）

其後年代を経ること久し延徳（一四八九—九一）明応（九一  
—一五〇一）の際臨済宗の名僧大道真源禪師再興二世亨仲和尚  
三世竹庵和尚四世の法脈中絶し唯寺有るのみにして数代歴遷す

指していた。また、勉強熱心で知性が高く、士道を貫いた高潔な人生を送った人である。



九 竹中半兵衛重治閑居の地

天下統一実現のた

大を制する)に命を懸けた人生でありながら、出世欲や領土的野心は皆無。流血の戦いを嫌う平和主義者であつた。より犠牲者の少ない戦法や説得により主将を味方につけたりした。智謀で平和的な世の実現を目指し、信義に篤い人柄。武

る凡そ百六十年間なり。萬治三年（一六六〇）庚子（かのえね）の年宝鑑国師古利（由緒ある名高いお寺）の煙滅を惜み徒弟魯教主座を当山に留錫（りゆうしやく・僧が行脚中に一時、他の寺院滞在すること）せしめ再興を命ぜしと

爾来穆州（ぼくしゅう）和尚遷化（せんげ：高僧の死）後数代を経遂に留守寺となり果て

昭和四十九年四月二十九日不審火に依り本堂弘法堂庫裡等全焼す

一五七九年 三木城攻略の最中。三十六歳の若さで陣中にて病死。嫡男重門は六歳と幼いため、後見人に久作や源介がなり、以後岩手城領内をよく守つた。

一五四四年 祖父竹中重道（重氏）・父竹中遠江守重元の子として揖斐郡大野町大御堂城で誕生。名は半兵衛尉重治。その子丹後守重門（幼名・吉助）。弟に二歳年下 久作重矩がいます。

一五五八年 重元は岩手城主・岩手弾正を攻略。半兵衛も岩手に移る。翌年、菩提山に砦を築く。父重元の死により家督を相続、そのまま斎藤龍興に仕える。

一五六四年一月 半兵衛、義父安藤守就（妻得月院は一六四八年九十八歳没）と従者十六名とともに弟久作の見舞いとして城内に入り、稻葉城を乗つ取る。その際、織田信長から城を明け渡すよう要請されるが、乗つ取りは主君を諫めるためのものとして拒む。

八月に元の城主・斎藤龍輿に返還。その責任を取つて隠居し、弟竹中重矩に家督を譲る。その後、北近江で浅井長政の食客となる。岩手に帰り、栗原山に隠居。木下藤吉郎が足しげくこの山に登り「三顧の礼」をもつて智謀にたけた武将半兵衛を訪ねる。このとき、信長公に仕え織田信長に仕え、羽柴秀吉の与力となる。

一五六七年 小谷城を攻め、お市の方と三人の姉妹（茶々・お初・お江）を助けた。嫡男重門誕生。一五七三年 黒田官兵衛の嫡男松寿丸を伴い長浜に帰る。岩手の地で松寿丸を匿い、命を救つた。

戦国時代は栗原山も度々の戦禍に遭い何回も村は焼かれた。室町時代末期には土豪栗原右衛門尉義師（よしのり）が廃寺跡を利用して築いたのが栗原山城の創始者であろう。栗原山に館を構へ斎藤義龍に仕える。その後竹中重元の叔父に栗原加賀守、その子に栗原重好、栗原右衛門尉重進が住んでいたと思われる。一五五六年、斎藤道三とその子義龍が長良川の戦い（岐阜市上土居川原田）のとき、兄の重好は道三側に、弟の重進は義龍側に相分かれるがともに討ち死にする。（子孫と考える栗原加賀守盛清は、江戸初期には垂井地方で府中村の代官を務めている）その後、栗原重光が岩手山城や栗原山城に住んでいたらしい。一五六四年二月、竹名半兵衛は、安藤伊賀守守就（半兵衛の義父）と計り、弟竹中重矩とともに手勢十六人を率いて斎藤龍輿の稻葉山城を乗つ取るが、八月頃、半兵衛は元の城主・龍輿に稻葉山城を返還し、その責任を取つて、弟重矩に家督を譲る。その後、近江の浅井長政に身を寄せ、菩提山城は従弟竹中重利に託す。後に病気がちな半兵衛にとつて、空気が良く、見晴らしの良い栗原山に閑居したことはこの地が療養に優れ、身辺の安全を考えて岩手に住まず栗原山に移り住んだと考える。さらに、竹中一族の屋敷があつたことや眼前に稻葉城が眺められ、静養の地としては最適である。実際の場所は判明できないが、連理の榊が九十九坊あたりの曲輪と推測できる。

**注** 栗原重光の子に重利がいる。一五七九年重利は重治の領地の内、三千石を領する長松城にいた頃、重治は幼い嫡男重門を残して亡くなる。すると、秀吉は重利を重門の後見人とし跡継ぎとする。そのため重利は秀吉に仕え、多くの戦に出陣し、一五九〇年小田原攻めの時には馬廻組頭として参陣する。また、一五九四年に豊後国国東郡高田で一万三千石に加増されて大名となる。さらに、文禄・慶長の朝鮮出兵に従軍し、従五位下伊豆守に叙任する。このように、重利は初めから秀吉を主君とし仕えており、忠誠を尽くしていた。

**注 史料の②を参照**

## 十 関白 豊臣秀次公側室のお長

栗原重光の次男に竹中貞右衛門重定がいる。初め美濃国守護家の土岐氏に属するが、後に信長・秀吉に仕えた。一五九四年十二月には摂津、河内、近江より一二三〇石を秀吉から与えられる。重定は安土桃山時代今の京都市伏見区竹中町にあつた竹中屋敷に住み、その後伏見城の普請奉行にまでなる。



知恩院に祀られている竹中重定のお墓。(どれかは不明)

重定の子お長は一五七八年生まれで、長松城（城主は重利）の近くの綾野で生まれている。（美濃国諸家系譜から）その後、お長は後に京都伏見にある竹中屋敷に移り、父親と一緒に住んでいた。秀次公が関白になり聚楽第に住むようになつたとき、秀吉から奥に仕える侍女を求められ、重利は弟重定の娘、お長の方を推した。また、半兵衛の妻の伯父安藤郷氏（兄は守就）の妻が、秀次付家老、山内一豊の姉通で、山内家と親戚になる。一豊も、お長の方の美貌と状況判断の確かさに感心し、推した。しかし、一五九五年八月二日京都三条川原で十八歳の短い生涯を閉じる。子には関白の四勇士丸二月一日生まれで六ヶ月がいたが、幼い四勇士丸もお長と運命を共にする。



**注 豊臣秀次公**  
7  
ご一族の墓所がある京都瑞泉寺に母子とも祀つてある。この場所は一  
六六一年角倉了により建立された由緒ある寺である)

このとき繼室・側室・子（四男一女）侍女合わせて三十九人が処刑された。

処刑の様子が江戸時代の書本に辞世の句とともに残っています。『聚楽物語』の記述には「六番目には、御土丸と申せし若君の母上なり。是も白き装束に、墨染めの衣着て、物輕々しく出て給ふ。この方は禪の知識に御縁ありて、常々参学（仏教を学ぶ）に心をかけて、散る花落ちつるこの葉につけても、憂き世のあだにはかなきことを観じ給ひしが、この時もいささかも騒ぎ給ふ景色もなくて」とある。

### 辞世の句

「うつつとは 更に思わぬ 世の中を 一夜の夢や

今覚めぬらん」

『聚楽物語』

口語訳 現実のこととは、決して思うことができない。この世の出来事はほんの一瞬の、一夜の夢のようです。その夢から今覚めたような気がいたします。

「とき知らぬ 花のあらしさに さそわれて 残らぬ身とぞ

なりにけるかな」『太閤記』

口語訳 季節を知らない風によつて多くの花々が散つてゆきます。私もまた他の皆様方とともに、何も残らない身の上となつてしましました。

「さかりなる こずえの花は 散りはてて

消えのこりける 世の中ぞ憂き」『太閤様軍記のうち』

口語訳 満開だった桜が散り果てたように、栄華を誇った私達も落ちぶれました。残されていることは辛いことだと思います。

尚、法名は母 珠月院殿誓光大姉（しゅげついんでんせいこうたいし）子 普現院殿誓濟大童子（ふげんいんでんせいさいだいどうじ）



注 写真は瑞泉寺にあるお長の供養塔  
秀次の妻子で助命された人物がいる。

一 若御前 正室 池田恒興の娘（注 織田家の家臣、後に羽柴秀吉の家臣になり犬山城、大坂城主、大垣城主を務め、

小牧長久手の戦いで戦死した猛将） 一五八二年秀次と結婚二年にして小牧・長久手の戦い後不仲になりすでに離縁している。

二 父は豊臣秀次、母は一の台の子 隆清院（一五八八年～一六三三年）は難を逃れていた。後に真田信繁（幸村）の側室

となり、御田の方（幼名なお・信繁の五女）（一六〇四年誕生）、幸信（信繁の三男）（一六一五年七月十四日生）を出産した。

三 隆清院の同母姉（一五七八年生）で後に梅小路家に嫁いだ娘（二女）も難を逃れている。

四 直系の親族では、淡輪徹斎（淡輪隆重）の娘・お小督の局との娘（四女）生後一ヶ月であった。お菊は祖父の弟の子の後藤興義に預けられた。

**追加** 秀次の子たちで生き残った三人を救つたのは秀次の母、秀吉の姉ともある。ともは、秀次が破廉恥な謀反人の汚名を着せられた時、孫だけは救うと覚悟を決め、三人の孫姫を救つた。一の台から生まれた二人の姫を秀吉は認めず聚楽第の外で育てられていたことと、謀反発覚の前日生まれた姫をそつと隠したことと、命が助かつた。

### 余談、

現在、日本酒の銘柄で「松竹梅」のラベルに蔵付半兵衛酵母仕込みと書いてある。どうして竹中半兵衛の名前があるかと不思議に思ったことがある。すると、裏のラベルには、「酒どころ伏見竹中町は安土桃山時代に軍師『竹中半兵衛』の一族の屋敷があつたことに由来しており、松竹梅の蔵付き酵母はこの名軍師の名にちなんでいます」と書いてあつた。実際は当時伏見城の近くに竹中屋敷があり、半兵衛が亡くなつた後は貞右衛門重定一族が住んでいたことを考えると貞右衛門酵母と名づけても良い。すると、栗原山に住んでいた竹中家一族の存在が大きくなつたようと思える。このような形で、後世まで半兵衛の名前が残つていると考えると感慨無量な気持ちになる



## 登場人物生年から死亡の年号

一 祖父 竹中六郎左衛門重氏（重道）初めて竹中氏を名乗る

（不詳）

二 父 竹中遠江守重元（彦三郎重基）

一四九七年～一五六〇年没 六十四歳

三 本人 竹中半兵衛尉重治

一五四四年～一五七九年没 三十六歳

竹中丹後守重門（幼名 吉助・重政）

一五七三年～一六三一年没 五十九歳

竹中重行 一五三二年～一五七〇年没

三十九歳 同母の兄

六 弟 竹中重矩（幼名 久作・彦作 重隆）

一五四六年～一五八二年没 三十七歳

七 父の弟 竹中出羽守（栗原重光）一五七四年没

八 重光の子 竹中伊豆守重利（幼名 源介 重信・重義・隆

重）一五三二年～一六一五年没 八十三歳

（竹中半兵衛のすべて 池内昭一編）（一説には

一五六二年生）大分市府内町 浄安寺に葬る。

法名 逸峯玄俊春岩院（寛政重修諸家譜）

九 重光の子 竹中貞右衛門重定（幼名 五郎作）一五五

一年～一六一〇年没 六十歳

伏見城普請奉行 京都知恩院に葬る。法名 崇

徳（寛政重修諸家譜）

十 重定の子 お長 一五七八年～一五九五年没 十八歳

伏見城普請奉行 京都知恩院に葬る。法名 崇

法名 珠月院殿誓光大姉

十一 お長の子 豊臣土丸 一五九五年一月一日( )

一五九五年没 六ヶ月 京都の瑞泉寺 に葬

る 法名 普現院殿済大童子

十二 重道の弟 栗原加賀守 (年齢不詳)

十三 加賀守の子 栗原加賀守重好 一五〇〇年( )

一五五六六年 五十六歳

十四 加賀守の子 栗原右衛門尉重進 一五〇三年( )

一五五六六年 五十三歳

### 注 史料の③を参照

## 十一 栗原村の領主変遷

一六〇三年から一六一二年までは高須藩初代藩主徳永寿昌(ひさまさ)その後長男昌重が一六一七年まで領主となる。その後一七七〇年まで徳川幕府直轄地。その中で一時期一七四二年から一七五〇年までは宮崎県の延岡藩二代目藩主牧野貞通氏。以後江戸時代最後の一八六七年は大垣藩戸田氏の預所となる。

## 十二 長曾我部盛親陣跡



関ヶ原の戦いでは西軍(石田三成)に属し、栗原山麓および岡鼻(象鼻山の南端)に陣を敷くが吉川広家の東軍への内通に依り敗色が濃厚になると戦わずして逃げようとした。

途中口ヶ島村・岩道村に陣を構えた松の木城主徳永寿昌・



## 十三 長束正家陣跡

慶長五年の関ヶ原の戦いで西軍(石田三成)に属し、六月に徳川家康が会津征伐に出発するとまもなく見なく水口城を出て大坂城に入り、次いで、安国寺恵瓊と共に伊勢に出陣して安濃津城攻めに加わった。決戦当日、境野付近に陣を置いた長束正家千五百人は、吉川広家らの裏切りにより本



に攻められ、捕縛された。城を開いて切腹（十月三日享年三十九歳）。合戦当日、東軍池田輝政・浅野幸長との間で小規模な銃撃戦があった。また、水口城に帰る際、薩摩藩島津義久等偶然出会い、養老山脈を東西二班に分かれて滋賀県水口町まで道案内をしている。

## 十四 栗原踊りと白河踊り

毎年九月の第三月曜日（敬老の日）の夜に栗原踊りが行われている。この踊りの起源ははつきりしていないが、古の話では、江戸時代後期にはあつたと伝えられている。この踊りは、農村地帯における五穀豊穣、家内安全を願いつつ、氏神の境内で踊られている。また、変装した「にわか」が繰出されることから、この踊りを「にわか踊り」とも言われている。太鼓・音頭・お囃子にあわせた輪踊りである。

また、昔から踊りの締めくくりとして、白河踊りを踊つて終る習いとなっている。

由来は「大垣藩兵が新政府軍に加わり、陸奥白河に布陣した奥羽越列藩同盟の反政府軍を破った。これは一八六八年一月から戊辰戦争のうち五月の北越戦争の出来事です。以来、三か月半の長期にわたり、ここ白河に滞在した大垣藩の兵士達はその間に昔からこの地に伝えられた白川踊りを習得したのであつた。その踊りは、鐘・太鼓を打ち鳴らして舞う豊年祈願と農耕慰労の盆踊りであつたが、白河で戦死した犠牲者の慰靈と兵士自身の慰労も兼ねるものとなつた。その後大垣藩兵は、郷里に帰つてから盆になると、大垣公園の広場でこの踊りを踊り続けてきた。」白河踊りが戊辰戦争の地福島県白河市から來ていたとは驚きです。

参考文献 垂井の文化財一九九五年発行から

## 十五 象鼻山（栗原山の山の神）五社巡り



栗原の水利は、橋ヶ町や中井野の水田は牧田川用水を利用している。栗原にとって水利は死活問題であった。このため江戸期寛政年間に、栗原山の谷に溜池が作られた。この水源の守り神として祀られたと推察できる。大正期までは土用の頃の旱魃時に、雨乞いのため深夜に松明を掲げて八幡神社・丸山神社（御嶽神社）・市杵島神社・中尾神社・清御子神社の順に参拝した。この風習を八幡<sup>1</sup>神社の小社祭に毎年行われている五社巡りとして今に伝えている。

## 十六 栗原の神社

### 一 中尾神社

場所 中尾山 祭神 大山祇神

由緒創建 不詳

注・イザナギ・イザナミの子神で  
おおやまつみの  
山の神



## 二 清御子神社 (清御子古墳 円墳 在り)

場所 清御子平山

祭神 天武天皇 (四十代)

創建 慶雲二年九月 (七〇五)

天智天皇の崩御の後

壬申の乱 (六

七一年) のとき、大友皇子と大海人皇子 (後の天武天皇) で日本古代最大の内乱戦争となり大海人皇子が伊勢路より御進軍当地にて行在所。



## 四 市杵島神社 (いわきしま)

場所 九十九坊

祭神 市杵島姫命

創建 不詳

広島県厳島神社に由来

注…スサノオノ命が、姉のアマテラス大神

に、行いについて誓われたときに生

まれし神

## 五 御嶽神社 (みたけ)

場所 御嶽口

明治初年 御嶽本社

より勧請す。分霊のこと。

明治十三年四月二十日に現在の場所に遷宮



## \* 栗原神の存在

九〇一年 藤原時平 (三代実録)

に記述 祭神 栗原氏の祖神 (鎌倉

幕府の末一三〇〇年頃廃絶)

創建貞觀六年 (八六四) 八月十五日



## 六 神明神社 (しんめい)

場所 堀ノ内

祭神 天照大神

とようけひめ

豊受姫神

創建 永徳三年 (一三八三) 九月十六日

寛文二年 (一六六二) 再建

(元は栗田七郎兵衛の屋敷)



## 七 八幡神社

場所 橋ヶ町 祭神 応神天皇（十五代）神功皇后の子  
創建 天慶五年（九四二）九月

朱雀天皇（六十一代）のとき 明治十年一月村社となる

注…応神天皇（十五代）は仲哀天皇（十四代）の第四皇子、母は神功皇后。在位中百濟よりわに王仁等が来日、漢学論語を伝え、また縫工・織工・鍛工・船匠などが百濟新羅から多数帰化した。神功皇后は仲哀帝の皇后で朝鮮の新羅を征した。



## 八 伊雜宮神社

場所 八幡神社境内

祭神 玉桂屋姫命 由緒創建 不詳

外宮である豊受大神宮（衣食住の産業の守護神）五穀豊穰に関係



## 九 常夜灯

清水から前川の中に、常夜灯がある。お灯明（とうみょう）さんと呼ばれて親しまれている。伊勢の大神宮が祀られている。

## 十七 栗原のお寺

### 一 西法寺（家紋は葵の紋）

創建 一四九七年（明応六年）  
初代 栗田順誓氏

一五四二年（天文十一年十月）  
住僧 真宗に転ず

注…栗原村は一六二七年から一七七〇年まで徳川幕府直轄地のとき、当寺との関係があった。



## 二 西念寺

創建 一四二八年（応永三十四年八月）

真言宗清淨院

一四七七年（文明九年九月）

住僧 教西

真宗に転ず寺号を西念寺と改める。



## 三 通玄寺

創建 一五二一年～一五二八年

大永年間天台宗の阿弥陀寺と称

したが大永年間中期

住僧 法秀 真宗に転ず

一五八五年（天正十三年）寺号を  
通玄寺と改める。



## 四 茂森庵

創建 一七〇三年（元禄十六年六月）

臨済宗伊勢国山田 正法寺の僧代雲

当地に来て創建

## 五 清水寺

創建 七五七年～七六四年（天平宝字年間）天台宗として

一二四七年（宝治元年）清水寺梵鐘鑄造

一四九〇年（延徳二年）天台宗

多芸七坊の一ヶ寺として創建説あり

一四九二年～一五〇一年（明応年間）  
天台宗より臨済宗に転ず。



注 写真は焼失前の清水寺  
(古川英治様から使用許諾済)



## 六 栗棘庵跡はりしおう寺

平成二十九年から三年計画で大谷砂防堰堤等の改修事業が実施されることに伴い、御嶽神社下の砂防堰堤の北側斜面の平地に寺院跡と推定される遺跡が清水寺の近くで発見されました。明治初期には茅葺き屋根の本堂と庫裏を備えた「りしおう寺」というお寺があつたそうです。別所方がお持ちの古文書には「九十九坊の一ヶ寺として象鼻山栗棘庵は清水寺」とあります。また、栗原古墳群にある「G32T07022 栗棘庵跡 栗原 山林 中世」にもこの栗棘庵の名があり、時代が過ぎて「りつきょく」という言葉が「りしおう」と伝承の中で変化したと推測している。

注 参考文献「栗原山九十九坊 象鼻山別所寺の歴史を訪ねて」  
安福彦七 著  
注 写真は当時の発掘調査風景（古川英治様から使用許諾済）

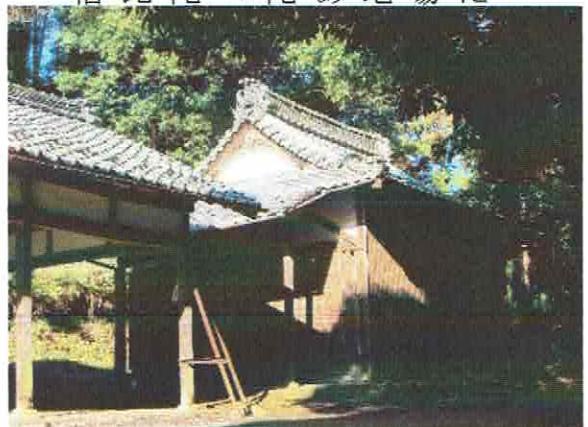
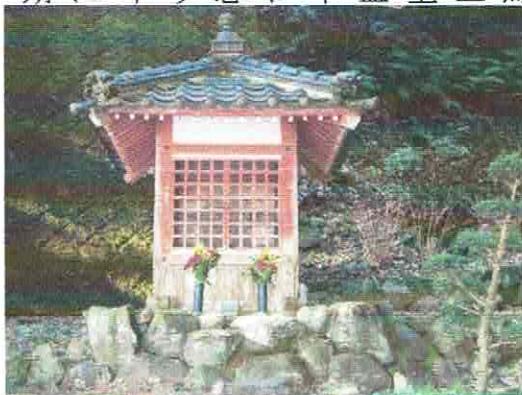


## 七 三昧の阿弥陀堂

三昧には大正六年に再建された阿弥陀堂がある。近くには火葬場（今は取り壊されてない）や六地蔵さんが古くからある。多良にあつた古いお寺の古木を使い阿弥陀堂に建て直された。お堂の中には、御厨子があり、その中には阿弥陀様が安置されている。この仏は比叡山で修業したことのある恵心僧都の作と伝えられている。

## 八 馬頭観音堂

三昧入り口の義人碑の横に、馬頭観音さんのお堂がある。昭和二十七年八月十五日に、牛馬の安全を祈願して建らてくれた。最初は血取り場の横にあつたが、昭和三十一年後半には、牛馬が農耕用に使われなくなり、観音さんの存在も忘れがちになつた。これではということでお墓に参る人が必ず通る今的位置に移転された。三昧祭りに立て垂れる長のぼりは、この時期に作られたものである。

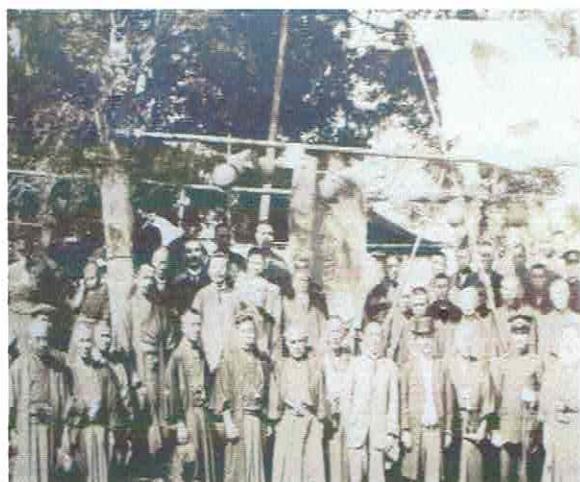


## 十八 栗原耕地整理・整田碑



栗原整田碑文

耕地整理は、明治四十三年から綾戸・宮代地区で始まった。宮代地区は工費九万円で大正九年に完成した。表佐地区では明治四十四年に着手し、大正十四年に完成した。栗原では明治四十五年三月末に耕地整理組合を設立して池・沼・堀潰れなどを畠土で埋立て、原野を開墾して耕地にして、畠や林地を水田に地目変換した。また、相川の上流の川底にマンボを設けて灌漑用水とした。工事費は河川改修を含めて五万円余りを要して大正五年に完成了。この経費は十年賦で償還された。投資実績は十七万四千円也。（大正の初め酒一升二十錢だったので今は約一万倍）この地区の字名をすべて「大正」に統一された。地区民はこの耕地整理を記念して整田碑を建立して祝福した。



この事業の時、土砂運搬などの際には「トロッコ」を使用した。この当時トロッコは珍しく地区民も初めて見る人も多かったと言われている。  
注 写真は大正十四年四月に建立された八幡神社内の栗原整田碑と祝福している耕地整理組合員

不破郡合原村栗原區西背中山東北沿泥川地勢高低不一致其高者苦旱魃低者患水澇而肥脊錯雜耕作不便區民常以為憂焉于茲有志者胥謀創立耕地整理組合者明治四十五年四月得官詳栗田条四郎等為之主以起工即築堤以防泥川之汎濫南導牧田川水北利井壺川流以共灌漑之用修道路鑿溝洫平均高低截長補短畫以為井大正五年八月竣工田界整齊水旱之害得而除卑濕之地變成良田收蔓倍蓰舉區受其惠焉大正十一年三月查叢地價事完了投資實拾七萬四千金矣嗚呼此業能樹立栗原區百年之大計足使區民各得安堵從其業而了孫亦永浴餘澤甚功豈不偉哉依刻貞珉以傳不朽而  
大正十一年四月岐阜縣不破郡長從七位勲七等 加藤虎雄

## 碑文の解説

不破郡合原村栗原区の西にある山から東北にある泥川沿いの土地の高低さは一致していない。

高い土地の持ち主は旱魃に苦しみ、低い土地の持ち主は冠水に苦しんでいる。しかも、土地の背（真ん中の所）はよく肥えているものの整地されおらず大変不便をしている。

区民は常に日照りに苦しんでいるゆえここに、有志の者が集まって耕地整理組合を創立する。

明治四十四年四月栗田条四郎等地主のおかげで役場から公に認可を得る。

以つて直ちに泥川の氾濫を防ぐ堤を築き、南に牧田川の水を導き、北にある井壺川によく流れる工事を始める。

以つて一緒に灌漑用道路を修理し、高低差を平均にする水路を掘り、圃場の大きいものは切り小さいものは補い碁盤の目を以つて境目をつける。

大正五年八月に田の境界を整えそろえて、洪水や旱魃の被害と低い湿地を無くすことができ、良い田に成り変わり、収穫は倍増し、区挙げてその恵みを受け大工事を終了とする。

大正十一年三月だいたいの地価を調べて完了す。實に十七万四千金を投資するなり。嗚呼この事業栗原区にとって百年かかると思われた大規模な計画を良くぞ成し遂げた。使用する区民は各々安堵を得る。

終わりに、この事業は永く子孫まで多くの恩恵をもたらす。

この甚大な功績はどうして偉業でないと言えるか、いや、偉大な事業である。依つてこの無垢な美しい石に刻み、後世まで永く伝える。

## 十九 栗原山義人碑

栗原山の東麓三昧の阿弥陀堂への上り口に栗原山義人碑とい

う大きな石碑がある。

栗原村は往古より水田を営むには用水がなく、又低湿地帯も多く干害と水害の両難に苦しんだ土地の



所です。用水は昔から隣村との争いが絶えず天正十七年（一五八九）にも北の村境を太閤検地のとき<sup>7</sup>大洞谷と定められた。<sup>17</sup>

このとき岡田将監が山境に墳を築いたが、代官辻六郎左衛門の時代に、栗原村は八間の猿尾堤を築くことになったのに対し宮代村から異論が出された。ついに文政四年（一八二二）六月には用水入れ方について又水論がおきた。このとき隣の表佐村より仲介があつたが双方とも納得できず遂には江戸に出て奉行の裁きを待つことになった。栗原より臼井利之、栗田光美等五人が代表となり江戸に行つたが、その裁きを待つうちに子使い方として同行した栗田九郎右衛門のほか四人は病に倒れ江戸の地にて他界した。栗田九郎右衛門は直ぐ栗原に馳せ帰り之を報告する。

この古文書は江戸時代の栗原庄村屋中の筆頭格であつた栗田右三郎氏の家に伝わっていたが、明治維新後東京へ出た栗田家

が第二次大戦中空襲で焼失したと言われている。前記の事件後百十数年を経て昭和六年（一九三二）村人達によりその偉業を偲び記念の碑を建て後世に伝えた。碑文は栗原に生まれ、大学に学び僧籍を得て関ヶ原瑞龍寺の住職になられた木田天真和尚のものなり。

注 天真和尚は岩手にある禪憧寺木田和尚の弟子になり、修行しながら大垣中学校を首席で卒業。

文政中栗原山北堺有被侵之事里人臼井利之

栗田光美等起而訴公争曲直未見其功半途

得疾先後歿于江戸事勒在墓碑同行栗田九

郎右衛門還報焉闐邑聞之莫不慟哭云嗚呼

可謂殺身成義也爾來霜華方一百頃日鄉人胥

謀修薦事併建一石千山麓題日義人碑蓋欲追

憶其死傳其績于後世也

昭和六年歲次辛未孟春三月 禪憧現住實宗師碑面題字

瑞龍禪寺苾芻 天眞謹撰併書

### 碑文の解説

文政の中栗原山の北境を侵さるるの事有り。里人臼井利之・栗田光美等で起こして（立ち上がって）公に訴へ、

曲直（不正なことと正しいこと）を争ふ。未だ其の功を

半途にしてみざるに病を得て、前後して江戸に死す。事勒（石に掘りつける・事の次第が刻まれている）が墓碑に在り。同行の栗田九郎右衛門帰りて報ず。村人之を聞きて

慟哭せざるなり（悲しみ残念のあまり、声をあげて泣かない者はいない）と云う。嗚呼身を殺して義を成すと謂ふべきなり。爾來（それからのち）霜が方に多くの花が美しく

咲いた様に降りる頃、郷人皆謀り薦事を修し（とりおこな

う）併せて一石を山麓に建て題して義人の碑と云ふ。蓋し（まさしく。確かに）其の死を追憶（過ぎ去つたことを思い出すこと）し、其の業績を後世に伝へんと欲するなり。

昭和六年辛羊 初春三月 碑面の題字は禪憧現住實宗師

瑞龍寺苾芻（僧侶） 天眞和尚謹んで書く

## 二十 栗原の小学校

(垂井町史と養老町史の通史編を参考にして記述)

明治五年 学制発布により省成義校設立

明治六年五月 省成学校設置 教員三人 男子四十三人 女子二十七人 授業料三十厘

明治十八年 室原村の原生(成)学校と合併し、両原小学校と改称。授業料中等科月5銭初等科月1銭

明治二十二年三月 両原小学校を改め、栗原簡易科小学校と室原簡易科小学校と改称

明治二十六年 新小学校令実施により、四ヶ年の栗原尋常小学校と室原尋常小学校を設置

明治三十年四月 両村合併し合原村となり、三十三年三月校舎を建て、合原尋常小学校と改称

明治三十四年 高等科二年を設置。合原尋常高等学校と改称

明治四十一年四月 小学校令の改正により従来の高等科第一学年を、尋常科五学年と改称

高等科第二学年は旧令により存続

明治四十二年 尋常科四年旧高等科二年を廃止。尋常科六学年と東に増築した校舎に高等科二学年を設置  
高等科授業料月十五銭

明治四十三年 十一月三日 校舎増築の落成式を挙行

大正五年 合原村立農業補習学校を付設

大正十一年 教育機関として施設要項並びに準則が制定

大正十五年四月 合原村立青年訓練所が開設

昭和十年三月 合原村立青年学校が男子五年制、女子二年制設置され、農業補習学校と青年訓練所は廃止

昭和八年五月 少年団発團式挙行  
昭和十四年 青年学校は義務となり、十二歳以上二十歳以下で他の学校に籍の無い者はすべて入学

昭和十六年四月 国民学校令により、合原国民学校と改称

昭和二十一年 教育改革により合原小学校六年生と新制中学校三年制(日吉と合原組合)が合日中学校として新設

昭和二十二年 合日中学校を廃止して不破中学校組合へ加入し不破中学校へ入学

昭和二十七年 合原村教育委員会設置  
昭和二十九年十二月一日 町村合併により、栗原は垂井町に、室原は分村して養老町へ合併

昭和三十年四月一日 栗原の生徒は従来の合原小学校へ、室原の小学生はすべて日吉小学校へ転校



## 二十一 八幡神社 補足

天慶五年九月（九四二）創祀。

朱雀天皇天慶五年九月創

建にして栗原氏の崇敬厚し。境内には樹齢な約七百年の天然記念物の「いちいかし」樹ある。

当社の有する栗原は、四世紀頃から柴原勝の姓を名乗る一族が支配していました。七八一年に栗原連を許されて右京にあつて朝廷に仕へ以後この地に住み生活をしていました。



その栗原の姓が地名となり現在に至っています。当社末社である清御子神社は、壬申の乱の際大海人皇子（天武天皇）が伊勢路より御進軍、当地を行在所とし、その時に美濃国從五位下、栗原の神に從五位上を賜った事により、天武天皇を祭神とする氏神社となり、栗原山麓に鎮座されました。

その後生活基盤が平地に移つたことにより天慶五年（九四二）九月現在の八幡神社を創建し、八幡神社を里宮、清御子神社を上宮として栗原の氏神社は崇敬されました。



注 昭和五年の校舎（合原小学校から使用許諾済）

## 二十二 栗原の史跡年表

守護土岐頼芸の戦い

一五四二年 西法寺真宗に改宗

一五六五年 竹中半兵衛重治 栗原山に隠居

一五八五年 阿弥陀寺を通玄寺として改寺

一六〇〇年九月 栗原村の太閤検地

一六〇〇年九月 関ヶ原の戦いのとき長束正家・長曾我部盛親

が栗原山山麓に陣

七〇五年 清御子神社創建  
七一七年 四十四代元正天皇が養老行幸の際ご休憩時に冠を置かれた石と棟札在り

七五七年～七六四年 多芸七坊の一ヶ寺として天台宗清水寺を創建

七八一年七月十六日 柴原を本居としていた柴原勝、奏請して

中臣栗原連と改賜

九四二年九月 八幡神社創建  
一二〇二年 九十九坊に騒動あり

一二四七年 九十九坊清水寺梵鐘の鋳造  
一三三五年 九十九坊は足利尊氏と新田義貞両氏の戦いで焼失

一三三八年九月 神明神社創建  
一四二八年 真言宗清淨院（後の西念寺）として創建

一四七七年 住僧 教西 真宗に改宗し寺号を西念寺と改宗  
一四九二年～一五〇一年 清水寺天台宗から臨済宗に改宗

一四九七年 栗田順誓氏西法寺を創建  
室町時代末期に土豪栗原右衛門尉義師（よしより）  
が廃寺跡を利用して栗原山城を造る

一五二一年～一五二八年 天台宗の阿弥陀寺を創建。

一五二五年八月 牧田合戦とは江州小谷城主浅井亮政と美濃国  
大永年間中 住僧法秀 真宗に改宗

一八九七年（明治三十年） 合原村ができる

一八九二年三月（明治四十五年）栗原耕地整理組合設置

一九三一年（昭和六年）栗原山義人碑建立

弥生時代に土器出土と境野遺跡在り。  
古墳時代に栗原一号二号古墳存在。

六七二年六月 壬申の乱の折大海人皇子が吉野よりご進軍の際  
栗原山麓を行在地

一六〇二年から一六二二年まで高須藩初代藩主徳永寿昌その後長男昌重が一六二七年まで領主。その後一七七〇年まで徳川幕府直轄地（一時期一七四二年から一七五〇年まではなぜか宮崎県の延岡藩二代目藩主牧野貞通氏）。

以後江戸時代最後の一八六七年は大垣藩戸田氏の預所  
一六二八年二月 高須藩徳永昌重改易 栗原村幕府領  
一六四七年二月 宮代村と栗原村水論  
一六六二年 神明神社再建

一七〇三年 臨済宗伊勢国山田 正法寺の僧代雲  
茂森庵を創建

一七九七年九月 栗原村権現谷・中尾谷・清御子谷に溜池創設

一八二一年六月 宮代村と栗原村水論

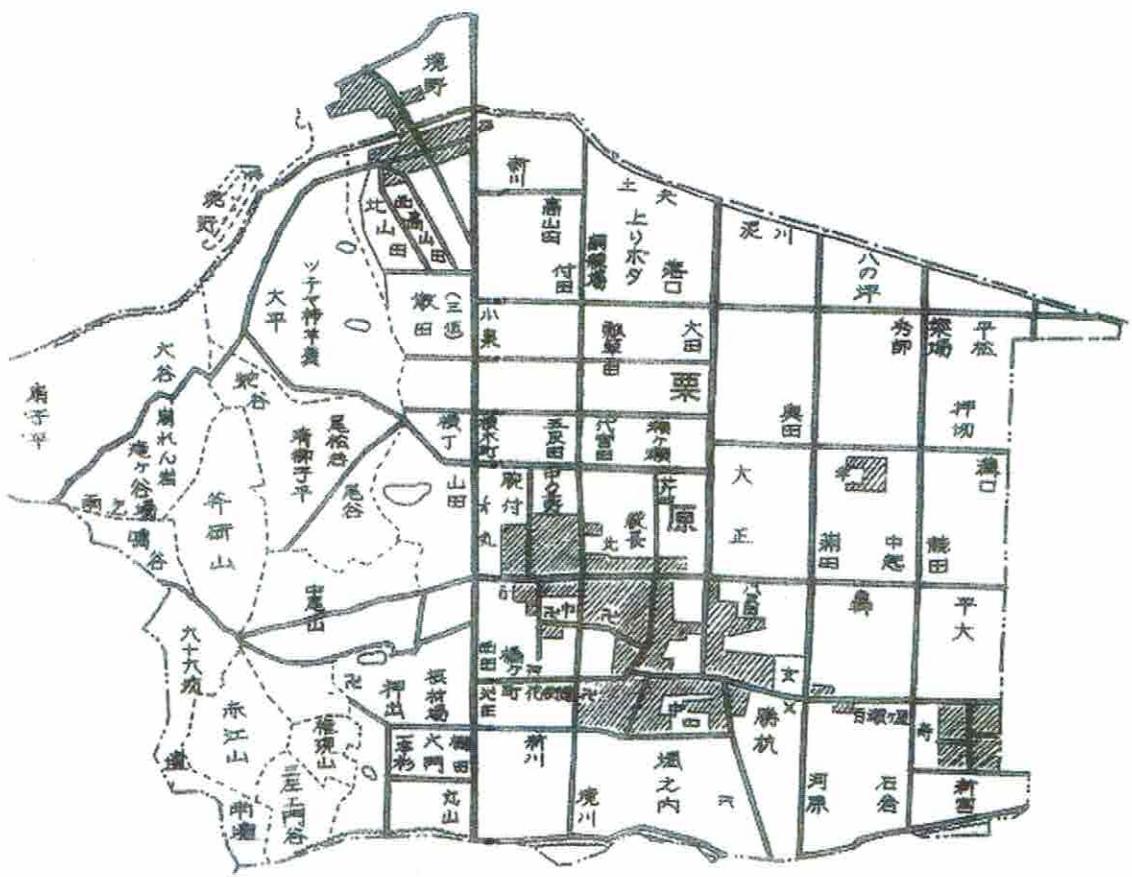
一八六八年 御嶽本社から勧請して御嶽神社を創建

一八七三年（明治六年） 栗原村に省成学校設置

一八七六年 栗原山全山にあつた五輪塔・石仏を九十九坊に集めて弔う

一八七八年 八幡神社を村社とする

二十三 栗原の昔の地名地図



二十四 九十九坊 爭動

鎌倉時代建仁二年（一一〇一）、將軍源頼家の時、「美濃国不破郡栗原村久保寺双寺中、百余坊争動を起こす」ことから、



八百年も昔のことや。鎌倉二代將軍 源頼家の使者、黒田次郎真与（まさよし）（幕府の高官、源真氏（まさうじ）の三男）

は、栗原の象鼻山で、九十九坊の高僧たちを前に、言葉はげしくつめよつた。

「ええい、まだわかりませぬか。鎌倉に味方しなければ、今す

ぐ九十九坊全山に火をつけ、あなたたちの首をもらいうける。

さあ、二つに一つじや。」

院政をしていた後鳥羽上皇は、武士から政治を取り戻すため一万七千の軍をもって不破の関のあたりに陣をした。

だが、幕府軍は十九万の軍勢で攻めのぼり、垂井一帯に陣を敷き、またたく間にこれを破っている。九十九坊も一戦も戦わずして黒田次郎に屈服した。一二二一年の承久の乱である。

このあたりの戦記については、『吾妻鑑』や『承久記』に詳しく書いてある。後鳥羽上皇は、ついにこの戦に敗れ、地の果てともいえる島根県の隠岐の孤島に流され、そこで亡くなっている。

さて、九十九坊を幕府に味方させた黒田次郎真与から十代目の黒田三七郎源正常（まさつね）のときである。承久の乱から百年余りたつた一三三五年であった。後醍醐天皇が幕府に反乱を起こしたとき、これに味方する新田義貞軍によつて、九十九坊はことごとく焼失したと伝えられている。（不破の地名から）

## 二十五 「続日本紀」 天応元年七月十六日

○癸酉。右京人正六位上栗原勝子公言。子公等之先祖伊賀都臣。是中臣遠祖天御中主命廿世之孫。意美佐夜麻之子也。伊賀郡臣。神功皇后御世。使於百濟。便娶彼土女。生一男。名曰本大臣。小大臣。遙尋本系。帰於聖朝。時賜美濃国不破郡栗原地。以居焉。

厥後因居命氏。遂負栗原勝姓。伏乞。蒙賜中臣栗原連。於是子公等男女十八人依請改賜之。

続日本紀・桓武天皇・天応元年条（七八一）には、

「右京の人・柴原勝子公が、『吾らの先祖のイカツオミは中臣氏の遠祖・アメノミナカヌシの二十世の孫です。イカツオミが神功皇后の御代に百濟に使いしたとき、百濟の女を娶つて二人の男子を生みました。その後、彼らがわが国に帰化し、美濃国不破郡に土地を賜つて居住し“柴原勝”的姓を負いました。先祖の関係で“中臣栗原連”的氏姓を賜りますよう、お願ひいたします』と言上した。古公ら男女十八人に“中臣栗原連”的姓を賜つた。また、村名の栗原村となる。」とある。

## 二十六 参考文献

- 一 垂井町史 通史編 昭和四十四年 発行
- 二 新修 垂井町史 平成八年二月 発行
- 三 竹中半兵衛隠居の栗原城址 第一回調査報告書 平成四年四月 岐阜県文化財保護協会 林 春樹
- 四 栗原山九十九坊の歴史を訪ねて 室原 安福彦七
- 五 竹中半兵衛重治公 パンフレット 垂井町観光協会 発行
- 六 栗原のれきし 水野金吾 著 平成九年九月 発行
- 七 くりはらわが街 合原公民館 昭和五十六年三月 発行
- 八 竹中半兵衛のすべて 池内昭一 編 新人物往来社 一九九六年二月 発行
- 九 豊臣秀次公と瑞泉寺 瑞泉寺発行 平成二十四年
- 十 「不破の地名」不破郡教育振興会 一九八八年 発行
- 十一 栗原踊り 垂井町合原公民館 平成八年 発行
- 十二 日本歴史地名大系「岐阜県の地名」平凡社

「続日本紀」から栗原の地名の由来(七百八十一午七月十六日)

栗原、原作助、據官  
本ト本坂本改

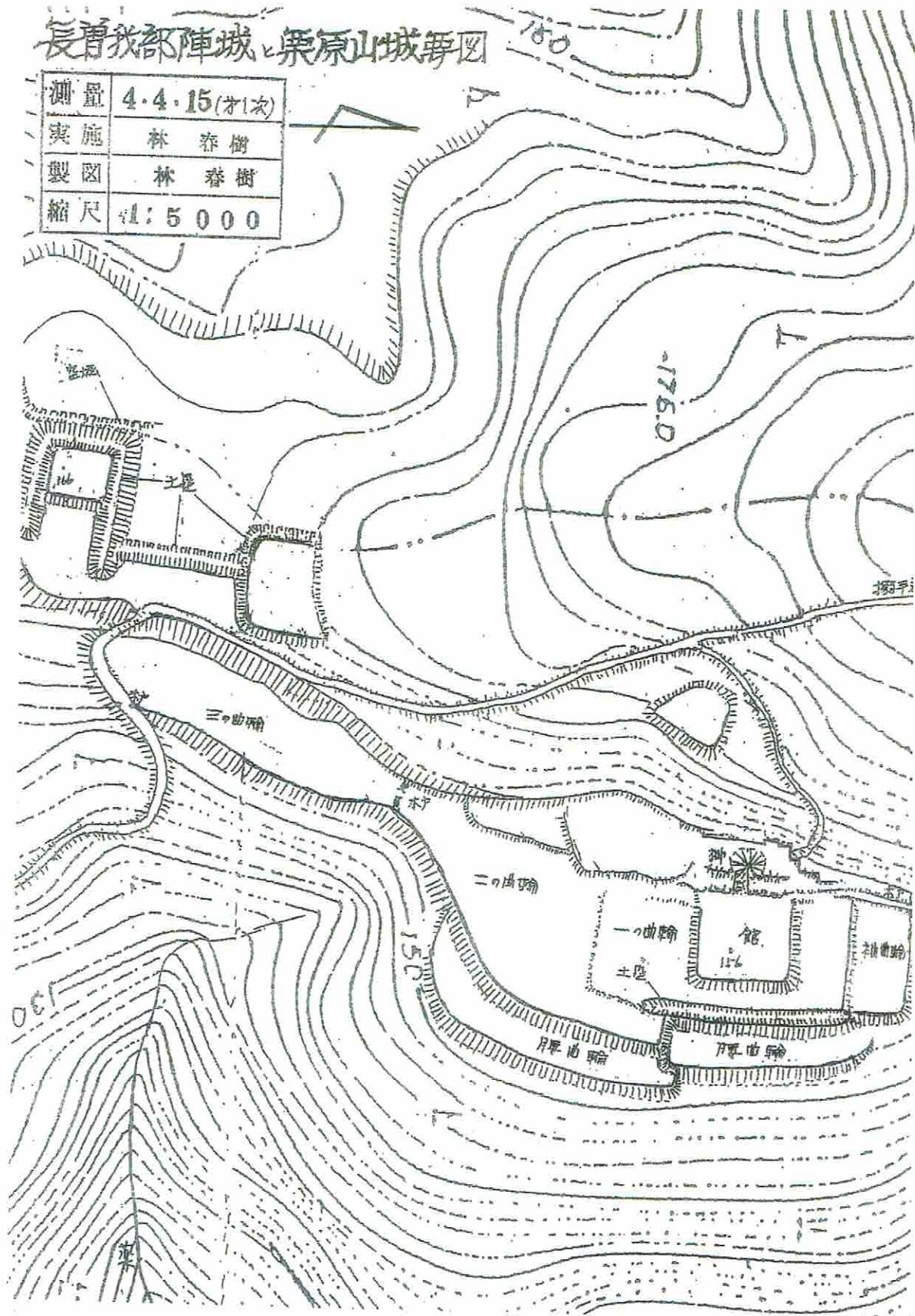
影、凋字之譜

栗原、原作柴原、  
據一本改、下同、  
一男、尾本作二  
男○名日本大  
臣、ト本官、  
本臣、大臣曰  
小本、本作、名  
大、大臣、九  
字、據尾本  
烟本、補

下。炎旱經月。百姓與嗟。九服懷怨。睽爲其父母屬。此靈寵雖竭至誠。未感。需澤。顧念。囚徒特宜矜愍。其自天應元年七月五日昧爽以前。大辟已下。罪無輕重。已發覺。未發覺。已結正。未結正。繫囚見徒。咸皆赦除。但八虐。故殺人私鑄錢。強竊二盜。常赦所不免者。不在赦限。○癸亥。駿河國言。富士山下雨灰。灰之所及。木葉彫落。○丁卯。正四位下藤原朝臣小黒麻呂爲民部卿。陸奥按察使如故。正四位上藤原朝臣家依爲兵部卿。侍從下總守如故。中納言從三位藤原朝臣繼繩爲兼左京大夫。從四位上藤原朝臣種繼爲左衛士督。近江守如故。造宮卿從四位上藤原朝臣鷹取爲兼左兵衛督。左中辨從五位上紀朝臣家守爲兼右兵衛督。近衛員外中將從四位上紀朝臣船守爲兼内庭頭。○癸酉。右京人正六位上栗原勝子公言。子公等之先祖伊賀都。是中臣遠祖天御中主命二十世之孫。意美佐夜麻之子也。伊賀都臣。神功皇后御世。使於百濟。便娶彼土女。生一男。名日本大臣。大臣遙尋。本系歸於聖朝。時賜美濃國不破郡栗原地。以居焉。厥後因居命氏。遂負栗原勝姓。伏乞。蒙賜。中臣栗原連。於是子公等男女十八人依請改賜之。○丙子。河内國言。尺度池水。以今月十八日。自已至酉。變成血色。其堤甚短。長可二町餘。廣可

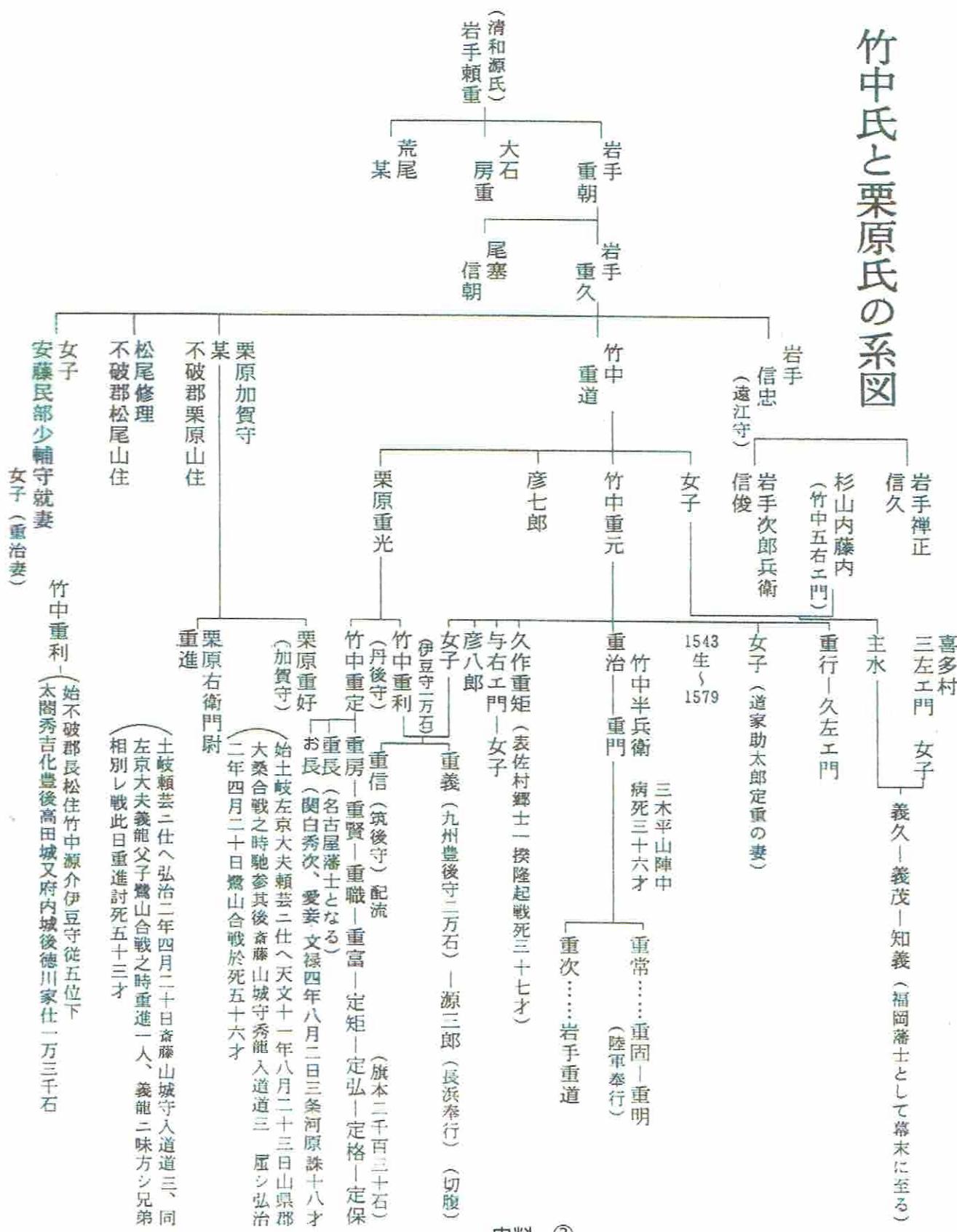
長曾我部陣城と栗原山城等図

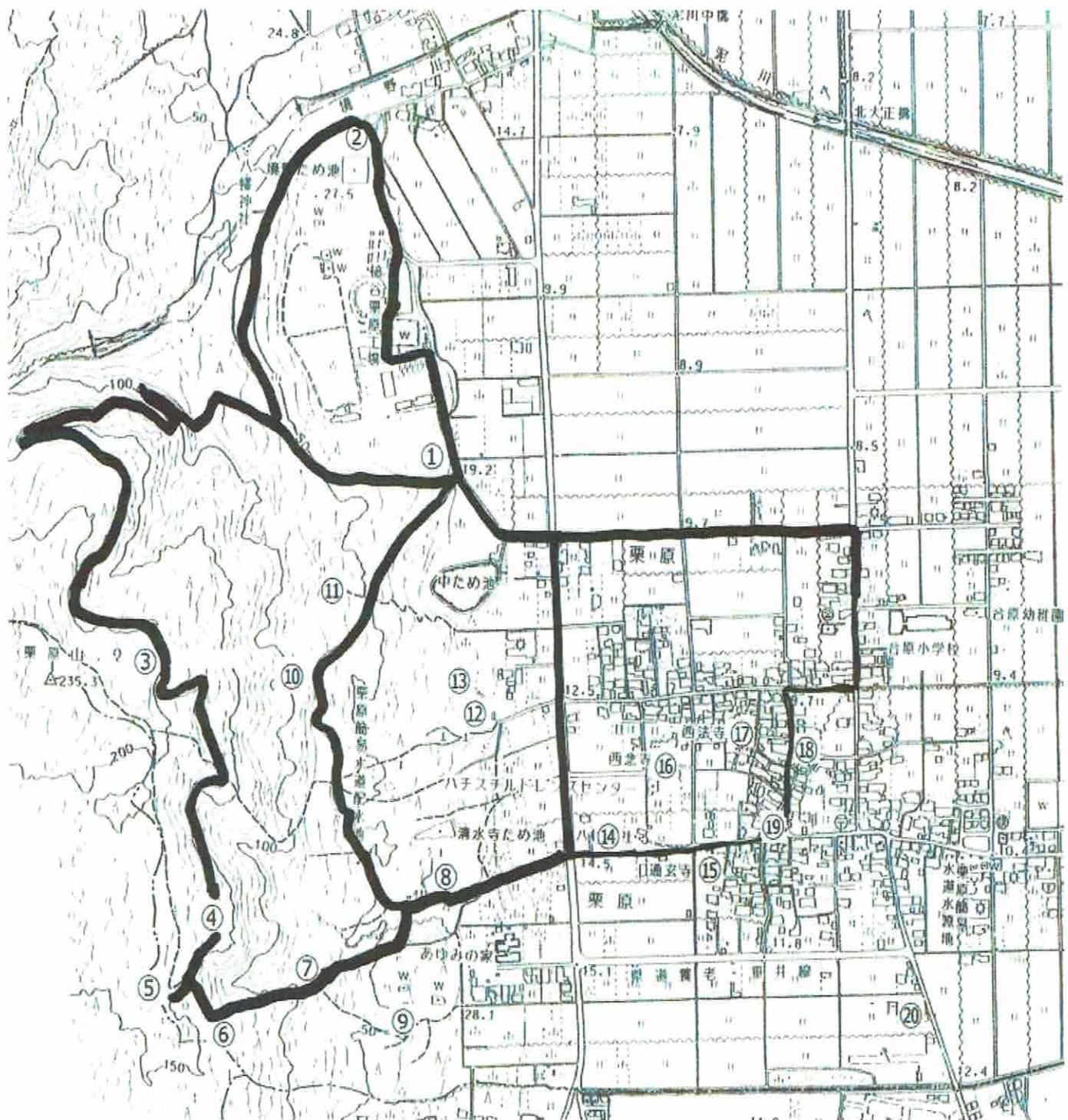
測量	4・4・15(才1次)
実施	林 春樹
製図	林 春樹
縮尺	1:5000



史料 ②

# 竹中氏と栗原氏の系図





## 栗原山史跡巡り案内図

- ① 黄金塚古墳 ② 冠石神社 長束正家陣跡 ③ 市杵島神社
- ④ 連理の榊 長曾我部陣跡 竹中半兵衛閑居の地 ⑤ 牧田合戦 ⑥ 九十九坊跡
- ⑦ 御嶽神社 ⑧ 清水寺 ⑨ 丸山神社 ⑩ 中尾神社 ⑪ 清御子神社 ⑫ 阿弥陀堂
- ⑬ 栗原山義人碑 馬頭観音堂 ⑭ 八幡神社 伊雜宮神社 栗原整田碑 ⑮ 通玄寺
- ⑯ 西念寺 ⑰ 西法寺 ⑱ 茂森庵 ⑲ 常夜灯 高札場 ⑳ 神明神社

史料 ④